

# 文字文化を否定する G T 明朝プロジェクト」

歴史を捨てた『文字文化の継承』を批判する

前田年昭（日本語の文字と組版を考える会世話人）

最近「官」批判、「東大」批判がやりである。しかし現在の批判は「官」や「東大」の「権威」そのものの批判ではなく、その「権威」を補強する役割を担っているのではないだろうか。「私たちも料亭へ行っていいですか!？」という雑誌『BRUTUS』七月十五日号（マガジンハウス）のキャッチコピーは、現体制の補完物としての「批判」の気分を表しているのではないだろうか。

はたして「東大」に象徴される現代の科学技術の「権威」とは何か。巨大化、細分化がすすんでいる現代の科学技術の、当面する、根本的で、焦眉の課題はどこにあるのか。結論を先取りしていえば、それは哲学の不在である。現代資本主義社会で企業が活力を失い、またいわゆる大企業病にかかれば、その生産物である商品の市場競争力が弱り、場合によっては倒産する。しかし「科学」はたとえ健全であってもカネが入ってこなければ停滞する。逆に、現代の細分化された科学のなかでひとつの「専門分野」として確立すれば、すなわち主要大学に学科をもち、学会が組織されれば、カネが流れ込んでくることは保証される。かくして、いま、大学の研究室でコンピュータを操作しているのが製薬プロパーからの派遣社員だったりすることは珍しくもない。「科学」が果たしている社会的責任は、いったいどこでどのように審判されるべきなのか。いまほど「公開」の重要さが強調されるべきときはないのではないか。こうした大学の姿を象徴する典型として、G T 明朝プロジェクトがある。

私たちはG T 明朝プロジェクトの発表会への、友人でありデザイナーである鈴木一誌氏への来賓挨拶招請を機に、組版、校正、編集、印刷、文字デザイン、ブックデザイン、著作など、書くことにかかわる有志による批評研究活動を組織し、発表会に際して、共同の著作として「来賓挨拶」を発表した。

G T明朝（通称・東大明朝）プロジェクトとは「文字文化の継承」をにかけて、「日本語の文字を電子化するプロジェクト」である。G TのGとは学術振興会の、Tとは東京大学の、それぞれ頭文字である。正式名は、平成七年度日本学術振興会産学共同研究支援事業「人文系多国語テキスト・プロセッシング・システムの構築に関する研究」および平成八・九年度日本学術振興会未来開拓学術研究推進事業「マルチメディア通信システムにおける多国語処理研究プロジェクト」という。プロジェクト当事者が発表会で自ら明らかにしたところによると建設国債の二億円もの資金がすでに注ぎ込まれ、五年間継続の予定という。

さる六月十七日、東京大学文学部一番大教室において、『六万四千漢字』発表会』が行われた。発表会の主催は実質的にG T明朝プロジェクトであった。司会は「多国語プロジェクト」リーダーの田村毅・東京大学大学院人文社会系研究科教授（フランス文学）。はじめに佐藤國雄・日本学術振興会理事が「二億円かけた事業で」「国民的資産として残したい」と挨拶、つづいて、「多国語プロジェクト」メンバーの山口明穂・東京大学名誉教授（国語学）が約一時間かけて「六万四千漢字」の説明にあたった。「時枝先生から国語国字問題にだけはかわらないようにといわれていたが、坂村先生がいまの機械なら出来る出来るというのでやった」「欲しい字がでないなら機械を替えてもらおう」「機械が悪ければ作った人の頭が悪いのだ」と語った。ここで、都合で遅れた吉川弘之・日本学術振興会会長から挨拶があり、「多国語プロジェクト」メンバーの片山英男・東京大学大学院人文社会系研究科教授（西洋古典学）と同メンバーの坂村健・東京大学博物館教授（情報科学）が説明に立ち、「私には出るか出ないかが関心の対象で、ちがう字が画面に出て通信できるということが肝心」と力説した。主催者側の説明につづいて、日本文藝家協会からの吉目木晴彦、中沢けいの両氏から来賓挨拶が行われた。両氏は「できないことはない」と断言する坂村先生の力強さ」をたたえ、G T明朝プロジェクトへの期待を表明した。

次に、デザイナーの鈴木一誌氏による来賓挨拶がおこなわれた。別稿として紹介するその内容は、電子文字の救世主として登場したG T明朝プロジェクト

に対して、私たち批判者グループが組織した研究活動の共同の成果として発表したものであった。

最後に、「多国語プロジェクト」メンバーの青柳正規・東京大学副学長（文学部教授、ギリシャ・ローマ考古学）が挨拶を読み上げて発表会は終了した。自ら「美しいものはいらぬ」といい、しかし内部では「こんどやるときはきれいな字をつくらうよ」という言葉がかわされたことをエピソードとして平然と語り、結局のところ、坂村氏に煽られた田村氏の大英断（！）でいったんひとりでできていた明朝体を新たなG T新明朝（？）という「画数と書き順がわかる字」「正しい代表字体を示す」ものに替えて出すという。

はたしてこのプロジェクトは何のための、だれのためのプロジェクトなのか。彼らが未来のためと称して語る現在への認識、その哲学的基礎はどこにあるのだろうか。

デジタル・アーカイブや電子図書館によって歴史を記憶・保存するという。「コンテンツを最新のコンピュータ技術でデジタル化することにより、博物館の持つ資料の保存・整理・公開の機能に新しい地平を開く」と坂村健氏が自画自賛する「デジタル・ミュージアム」とは、「まず第一に資料をデジタル・アーカイブするミュージアムである。従来の紙ベースの資料や写真は、年月により劣化し、情報が失われてしまう。それらの劣化しやすい資料も、デジタル化し記録することにより半永久的に保存可能な情報資料にすることができる」

（『デジタル・ミュージアムと文字』一九九七年『歴史の文字・記載・活字・活版』所収）

CDやMOなどの大容量媒体に記憶させたデータがほんとうに「半永久的に」読み出せるのかどうかという問題はここではひとまずおいておこう。歴史とはいったい何か。過去の歴史は石のように永久に変わらないものなのだろうか。歴史（過去）が唯一不変のものだとすれば、歴史は「劣化」しないかぎり永遠に記憶されることになる。歴史は書き換えられることはありえないのだろうか。「新しい史実の発見による歴史の書き換え」ということもあるが、これは書き換えそのものではなく、「唯一不変の歴史を書き換える場合」について述

べたにすぎず、つまり歴史はただひとつの史実からなるという見方、考え方と同じ土俵に立ったものだ。

過去とは未来との対立物の統一であり、せめぎあいである。過去と未来とは互いに反し、また成り立たせ合う。その連続と切断の境界が現在である。現在はその瞬間ごとに現在であってつねに動いている。永遠に動かぬ現在など存在しない。すなわち過去をとらえるということは現在をとらえるということである。過去のとらえ方は現在のとらえ方であり、現在のとらえ方が過去のとらえ方に貫かれる。現在に対する認識が変われば過去のとらえ方も変わる。最近流行りの自由主義歴史観を、ただ「歴史の抹殺」や「忘却」だと非難しても、その批判は根源的批判たりえない。問題は、過去の特定の史実を隠蔽するような見方、考え方、すなわち、現在への認識にある。批判は自由主義歴史観による現在への認識をこそ正面から批判する必要があるのである。ここに歴史の哲学がある。

文字について哲学として考察してみよう。他者と関係する唯一の動物としての人間は、コミュニケーションの手段として言語を手にし、文字を生み出した。以来、書くという技術は、おおざっぱに言えば、書くこと、印刷、コンピュータという変化を経てきた。しかし、もっとも大きな革命は書くことであり、書くことが、たえず消えゆく音声を、空間にとどめ、話し言葉がそこでしか存在できない現在から言葉を切り離れた。話すことは無意識の世界から現れてくるが、書くことにははじめから目的意識が貫かれている。

手書きの文字はどれひとつとして同じものはない。差異を差異として数えれば、人類の無限の歴史のなかでは無限と数えることもできよう。しかしコミュニケーションするするという目的意識は、相対した人間をして、そのさまざまな差異を選び分け、ある形とある形のちがいは捨象して同じ字だと認識せしめる。文字は情報交換用符号だというゆえんである。差異を同じと選別する基準は何か。声でも同じ問題があり、日本語を母語とする人びとにとって「オ」として聞こえるものは朝鮮語を母語とする人びとにとって「오」か「어」か、さらに

「異」でもありうる。あいまいで不連続な音の差異をいかなる基準で同一とし差異とするかという基準があり、言語学ではこれを音素という。

同一であることと差異であることもまた対立物の統一であり、互いに反し、また成り立たせ合うし、その境界はたえず変化して運動している。互いに等しい二つのものはない。ある側面、ある条件のもとで、その限りにおいて同じであるというのである。すなわち同一であることの基準に貫かれるのは目的意識性である。目的意識が変われば、基準も変わり、結果、同一と差異とは互いに浸透し合う。書くことの技術の連続した変化と発展段階にしたがって、手書き文字、印刷文字、電子文字のそれぞれにおける、同一と差異との境界もまた変化する。

ここで、人間の認識への道のりを考えると個別性から特殊性へ、普遍性へというらせん状の発展の繰り返しであることがわかる。普遍性は、たんなる抽象的普遍性、全体性ではなく、個別で特殊なものの豊かさをもち普遍性である。つまり、全体性の獲得は、個別や特殊を排除したところにあるのではなく、豊かな個別や特殊のなかに貫かれた普遍性を見いだすところにあるのである。

G T明朝プロジェクトは「現在および過去において使われてきた漢字を可能な限り収集」するというが、必須の義務である文字の収集範囲と典拠文献の公開はなされていない。なぜなら二次資料にもとづく文字表同士の集合は、豊島正之氏が的確に指摘しているとおり、原文献に対する転写方針の差による字体の改変、および典拠不詳文字の無批判な継承という問題を生むからである。しかし彼らは依然、隠蔽したままである。すなわち、その数の多さは、相異なる複数の目的と方針が雑居した二次資料の集合によって作られた、個別や特殊を排除した空虚な全体性、目的意識性（動機と志）のない文字集合である。

彼らのいう「精選」や「析出」は何らかの包摂規準がなければありえないではないか。明朝体とゴシック体の違いは結局のところ「同じ字」なのかどうか。彼らの言うG T書体と明朝体とは「同じ字」なのかどうか。ここまできると、違うと言う人がいれば違うという不可知論の泥沼からけっして抜け出せないこ

とがわかるだろう。同一と差異との弁証法を理解することがなければ、「すべて」や「無限」もまた証明は不可能である。

いくら文字が多くてもコンピュータで扱うことは可能であると、坂村健氏はことあることに強調する。しかし、はたして問題になっているのは、可能か不可能か、なのだろうか。何のため、だれのためという動機と志、目的意識性が問われているのではないか。書くことの技術と歴史への眼差しを欠いたコンピュータ技術万能論は、動機と手段とが逆転しているのである。近代科学に基礎をおく非歴史的な世界観は、細分化された分業のなかで世界を逆立ちさせる。「違うという人がいれば違う」(坂村)という立場で作られた文字集合には公開するにたる包摂規準はありえない。主観主義の泥沼のなかで、ひたすら「数が多いこと」が普遍性であり、全体性だという錯覚のなかでもがくしかない。

歴史性を排除し、テクノロジーの全能さに対する信仰を絶頂にまで高めたイデオロギーこそ、現代資本主義に特有なブルジョア・イデオロギー形態である。このイデオロギーは、現代資本主義社会の危機が露呈してしまった脆弱さを徐々に取り除き、その矛盾を「技術的に」解決して危機の爆発を回避すると宣言する。「正しく美しい日本語」を求める思潮がこの能天気な「技術万能論」と結びついたとき、いかに醜悪なエセ「学問」が生まれるか、G T明朝プロジェクトは事実で示しつつある。

奇形化し、腐敗した現代の科学技術のあり方を見直す焦眉の課題は、動機と志の哲学である。それは歴史への眼差しから生まれる。人間の思想の発展過程は弁証法そのものであり、自然と社会における対立物の統一、せめぎあいの認識であり、得られた認識と実践との反復運動である。自然と社会における対立物のたたかいと統一とは何か。それは、自然と人間とのせめぎあい、人間と人間(階級と階級)とのせめぎあい、人間の新しい思想と古い思想とのせめぎあい、という三つの分野である。それぞれ生産闘争と自然科学、階級闘争と社会科学、思想闘争と哲学である。

ここに、過去に支配された現在でなく、現在が支配する過去という科学の立

場がある。あるはずと仮定した、架空の未来（劣化することなきテキストという形而上学的幻想）に支配されたG・I・明朝プロジェクトは、自然と社会の弁証法に反している。

自然と社会の弁証法を否定するこのプロジェクトは必ずや自然と社会の弁証法によって否定されるにちがいない。